

## 5. 「ディスクレパンシーへの対応」

九州大学歯学部小児歯科学講座教授

中 田

稔

ディスクレパンシーの臨床的対応について論ずる前に、ディスクレパンシーの定義を明らかにしておく必要があると思われる。これがどんな原因であれ、tooth to denture base discrepancy、すなわち歯とあごの不調和を指すのであれば、歯列弓の拡大によって不調和を解消するかあるいは抜歯を行って歯の数を減らし、残った歯を並べ直すというのが臨床的対応ということになる。

しかし一部の人達によって指摘されているように、ディスクレパンシーが文化の発達の影響を受け、人類の進化の結果として起こってきたものと定義するのであれば、その臨床的対応はきわめて限られることになる。つまり抜歯による歯の数の減少であごとの不調和を解消する以外に手段はないことになる。

最近よく云われているような、幼児においてそしゃく機能が不十分であることによって、あごの発育が十分でない、そのために歯とあごの不調和が起きるというのは、いわばトレーニング不足であって、進化の問題とは切り離して考える必要がある。

いずれにしても、私は進化によるディスクレパンシーを個人レベルで診断することは現在のところ困難であると考えており、従っていわゆるディスクレパンシー様症状に対しては、その原因が何であろうと対症療法的に対応するのが実際的でないかと思う。